九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

教育思想の淵源と「建学の精神」に関する一考察 ： 山口県出身の大学創設者を事例として（上）

岩武, 光宏
拓殖大学 ： 専任職員

https://doi.org/10.15017/5068312

出版情報：総合文化学論輯. 16, pp.111-127, 2022-05-01. 総合文化学研究所
バージョン：
権利関係：Copyright (C) 総合文化学研究所 all rights reserved. この論輯の全ての文章・画像の権利は、 総合文化学研究所に属します。無断での使用・転載を禁止いたします。

教育思想の淵源と「建学の精神」に関する一考察

― 山口県出身の大学創設者を事例として（上）―

岩武 光宏

はじめに

本論輯前号（拙稿［2021］）では、教育思想の淵源を大分県に求め、その地域性および歴史的特異性が近代の私立大学創成へどのように展開したのか、そのダイナミズムを論じた。それは「人間中心の社会」への変革を検討するうえで前段の議論として大学の「建学の精神」を材料に考察を試みるものであった。着想の端緒には、前掲［2021］で述べたとおり半世紀余前の岩畔豪雄[1]の著書『科学時代から人間の時代へ』、『戦争史論』によってインスパイアされた部分が大きい。とはいうものの、岩畔の高邁にして広範囲に及んだ知的営為（大戦の省察）の解釈は容易ではない。ゆえに筆者は科学技術から人間中心への社会変革の蓋然性を敷衍していくことを主眼とする。その蓋然性を示唆しているのは人間社会の実相である。まさに現代の各国の兵器は高度な科学技術が駆使されたものであり、とりわけ「核」、「AI」の技術はそれを制御するのは人間にほかならないという現実を世界に突き付けている。この情勢を踏まえて、教育思想の淵源を解明する意義は、あらたな知的基盤を創出するうえでも不可欠なものと考える。

本稿では、前号に引き続いて教育思想の淵源と「建学の精神」をテーマとするが、考察の対象を山口県とする。同県を対象とする理由は、前号（大分県を対象）同様である。すなわち拙稿［2018］であきらかにしたように、旧制私立大学 25 校[2]の学祖・創設者の出身分布をみれば、山口県は 6 名（2 校を創設した人物を含むため、延べ人数とした。実数は 5 名）を輩出しており、この数字は全国において京都府に次いで多いからである。さらに本稿で述べるが、戦後創設の新制私立大学をくわえれば、実に多彩な大学創設者群像の事例が浮き彫りになる。また、内閣総理大臣の輩出においても全国最多という人材的特色を示している。この特色は明治維新以降でのいわゆる長州閥による派閥力学による権力基盤継承の果実という側面もあるが、そもそもの地域性から紡ぎ出された教育思想と無関係ではあるまい。大学創設者および建学の精神と同様に、近代以前にその淵源は構築されており、地域における教育思想の起源より生成されたものと考える。

山口県の政治的精神性

山口県は本州の西端かつ三方を海で囲まれた地理的特徴があり、瀬戸内と日本海の結節点である関門海峡（下関）を通じて文化、情報の交錯の拠点でもあった。それは、たびたび同地域が歴史上の舞台となってきたことをみてもあきらかである。室町期の大内氏の時代

には、山口は「西の京」として、京都の伝統文化の影響、大陸の先進文化の受容という両面により、文化的特性が形成された。とりわけ応仁・文明の乱以降は京都が荒廃し、大内氏が下向してくる公家や文化人を庇護したことで文芸が盛んになった[3]。中国地方から北部九州へと広範囲に勢力を拡大した大内氏であったものの、戦国期を経て西国の覇権は毛利氏へ変わっていった。安芸国の国人の一人であった毛利元就は 1555（弘治元）年に陶晴賢を厳島の合戦で倒し、1557（弘治 3）年には大内義長を滅亡させた[4]。利岡［1984］によれば、「毛利氏の領国化の傾向は、安芸・備後、周防・長門、石見、出雲・隠岐・伯耆・備中の順を以て進み、天正十六年以降領国全域にわたって実施された惣国検地の結果に基づいて、天正十九年に豊臣氏より八カ国百十二万石の所領が安堵され、最終的に領国の境界が確定するにおよんで略々成立した」（p.267）と述べられているように、段階的に中国地方を経略・統一したことが鮮明であり、家臣団を編成・強化することで勢力を拡大したのである。再び利岡によれば、「譜代家臣の把握の成功と強化によって中核家臣団を形成し、それによって国衆・外様などの新たに服属した家臣を牽制し、その離叛を防ぐと共に、彼らの勢力を殺いでいくという方針をとったのである。この譜代家臣団編成の成功が、軍事的側面から毛利氏の戦国大名化を必然たらしめ、延いては近世大名への昇化を可能にしたのである」（p.269）と、その勢力拡大過程の特徴を指摘しており、戦国期の毛利氏は領国支配において家臣団の活用に腐心したことが窺える。しかしながら、関ケ原の合戦で西軍に与した毛利氏は防長二カ国に減封された。江戸時代の毛利家は、長門国阿武郡の萩に城を置く外様大名として活動することとなり、幕府に認められた萩藩の公称高は 36 万 9 千石余であった[5]。防長とは、周防国と長門国であり、現在の山口県に相当する。いいかえれば、毛利氏は大内氏同様の勢力拡大を図ったものの、独自のノウハウを限定的に凝縮せざるをえなくなり、そのエリアが防長両国であったともいえよう。したがって、凝縮を余儀なくされたエートスは、徳川幕藩体制 260 年の軋轢（外様大名の政治的ストレスおよび普請など経済的負担の増大）を強いられたことによって、あらゆる知的欲求の蓄積が後年の起動力へと繋がった側面は見落とせない。以上のような中世から近世にかけての歴史的背景における膨張から凝縮に向かう過程における角逐と葛藤は、どのような地域的精神性を生成したのであろうか。一般的には、司馬遼太郎の『王城の護衛者』や古川薫の『山河ありき』で描かれている長州藩の徳川幕府への怨嗟に起因する元旦の儀式（毎年恒例で家老が藩主に討幕の伺いを立てる）[6]が象徴的である。磯田［2013］によれば、この儀式に懐疑的な見方があることを踏まえたうえで、「少なくとも 1650 年ごろまでは現実に行われていた可能性が否定できない」（p.103）と述べており、根拠のひとつに山本（戦前に貴族院書記官を務めた）の随筆［1958］を挙げている。筆者は、この儀式の真偽よりも、むしろこのような説話が一般的に浸透している実情が少なからず現在にも通じる山口県の精神性を象徴していることに注目したい。政治的には長期間にわたり反骨精神が涵養され、地理的には大陸に近く文化の流入の早さによる先進性とそれにともなう知的欲求が蓄積されたことが地域的特性であり、その精神性は前述の儀式に収斂される。すなわち、拙稿［2018］でも論じたように「新・旧システムの角逐があ

った地域に知的欲求の高まりがみられ、やがてそれが建学のダイナミズムに繋がる」という筆者の仮説を立証する要件を十分に満たすものがあるといえよう。具体的にいえば、前掲［2013］で指摘されているように、江戸時代の長州藩では「防長風土注進案」という現在の経済学分析のような資料を天保の改革の時に作成していたことは驚嘆に値する。また、このようなことが長州藩で可能だった理由について、磯田は防長地域の「識字文化」を挙げている。くわえて、「藩官僚の手腕の高さも、もちろんでしたが、農民・町民もリテラシーの高い人々」（pp.111-112）であることを強調しているように、教育水準の高さ、すなわち庶民教育をも包摂した層の厚さが後年の情勢認識と行動力に繋がったことに論を俟たない。

幕末維新期において、長州では周布政之介、長井雅楽らが幕府の開国政策を支持していた。しかし、当初より長州は攘夷論であり、攘夷を実践（四国連合艦隊砲撃）している。長州の尊皇攘夷運動の中心となったのは吉田松陰とその弟子であった。松陰は会沢正志斎より「水戸学」の影響を受けていた。森［2018］によれば、「前期水戸学の朱子学の正統論は日本的な成長の結果、後期水戸学の国体論へと変容する。≪国体≫という語自体は古くからあるが、いま国体論と言う時の概念は水戸学に淵源する」（p.394）と論じているように、水戸学とは儒教と国学との混合種であり、維新の志士に大きな影響を与えたことにほかならない。再び、前掲［2018］では、「水戸学自体は尊皇敬幕の思想であり、維新には直結しないが、明治新政府の元志士たちの教養の苗床となっていたのが水戸学であったことまでは否定できない。水戸学は尾骶骨として残り、存在を隠微に主張するのである」（p.400）と述べているように、国体論と儒教倫理の合体は直接ではないにしろ後年の「教育勅語」などに[7]、その重畳性は広く作用していると考える。また、笠谷［2017］は『攘夷論者である会沢の結論は、何と「夷狄」と呼んだ欧米勢力の技術を学んで導入すべきであると説いている』（p.100）としたうえで、「モノとしての機械や艦船を導入するだけではだめで、それを自由自在に操作できる技法や学問も一緒に導入し、学習する必要がある」（前掲同）と会沢が主張していたことは、開明論者も顔負けの近代化＝欧米化論であると指摘している。いわば、これが水戸学なるものの内実を如実に物語っている。さらに中野［2012］によれば、『水戸学の尊王攘夷論は「攘夷・鎖国」論から「攘夷・開国」論へと転回しうる思想であった』（p.34）と述べたうえで、会沢の尊王攘夷論は「予期せぬ西洋の衝撃に対する感情的な反発などではなく、周到に準備された国家戦略だった」と論じているように、旧来型の歴史像を見直すべき必要があることを示唆している。したがって尊皇と攘夷は不可分のように結び付けられるが、本来は個別の思想ではないだろうか。攘夷とは外敵を打ち払い入国させないことを意味しているが、管見の限りでは攘夷が鎖国を意味するものではないと考える。あくまで国家民族の自由と独立を確保するためであり、実際に明治日本は開国することで攘夷した（独立を守った）のではなかろうか。1859 年の安政の大獄により松陰は斬首されるが、久坂玄瑞、高杉晋作、桂小五郎（後の木戸孝允）、伊藤博文、山尾庸三、品川弥次郎らの門弟が尊皇攘夷運動を引き継ぎ、明治維新を遂行していく。榊原［2018］は、松陰の弟子たちが『決して「開国維新」ではなく攘夷だったことは留意すべきだろう』（p.78）と指摘したうえで、維新後には『彼

らは開国を推進するのだが、幕末には孝明天皇の「攘夷論」を支え、尊皇攘夷論の中心だった』(前掲同)と述べているように、歴史は勝者によって書かれることを示唆している。すなわち、維新の原動力となった薩長両藩が当初から開明的であったかのような印象を与えがちであるが、幕府の方が開明派であり薩長の方が守旧派であったという事実を意味している。しかし、途中で政策転換した敏捷さと状況認識力の的確性は、開明的な教育思想が草莽へと浸透していた証左にほかならない。その意味において、長州の眼差しは幕府のそれとは歴然とした違いを呈していた。拙稿［2021］でも述べたとおり、『その眼差しとは、徳川 260 年の安定的な環境下で生成された幕臣、直参の「教養」とは異質のものであった』というように幕府崩壊過程をみれば、その差は鮮明である。いいかえれば、幕末維新期における長州の対応能力は、それまでの蓄積された精神性とリテラシーの高さが合一昇華したものと評価されよう。

山口県の学祖群像

近世から近代へと向かう過程において山口県の教育的基盤醸成を支えたものの 1 つに藩校明倫館（1719 年 1 月に開校）が挙げられよう。くわえて三田尻で河野養哲が御船手組の子弟を教育する私塾（越氏塾）もその 1 つであろう。さらに 1815 年 4 月に上田鳳陽が山口の中河原に山口講堂を開設した。小川［2003］によれば、「藩主重就は江戸から帰国するたびに、納戸銀で書籍を購入し、明倫館と越氏塾に下賜していた」（p.166）というように藩主が支援に注力していたことがあきらかでおり、越氏塾は維新期には三田尻学習堂、三田尻講習堂と改称され、山口明倫館（山口講堂、山口講習堂）と共に萩藩の軍事的基盤として重要な教育機関の役割を果たしている。

また、牛見［2007］によれば、長州藩が幕末維新期に数多くの有為な人材を輩出した原動力は松下村塾を主宰した吉田松陰にあるとしたうえで、松陰も防長の教育風土によって育まれたことを考えると、明倫館創設の実質的立役者であった山県周南の存在が長州藩の学問・教育風土を拓いた淵源に位置すると論じている[8]。山県周南は荻生徂徠に師事しており、いわゆる徂徠学[9]を明倫館に反映させている。いいかえれば、朱子学を標榜した明倫館初代学頭小倉尚斎との信頼関係のなかで二代学頭山県周南は反朱子学的な徂徠学を浸透させたことにほかならない。後年、山県太華の学頭時代に再び学統は朱子学に転換した。しかし、享保から嘉永期での約 120 年間の徂徠学の浸透は着実に地域での学問的土壌に根付いていたといえよう。趙［2015］の要旨によれば、〈徂徠學の根幹は「古文辭學」である。荻生徂徠の「古文辭學」へのアプローチの作業は主に二つのルートで行われる。一つは、「道」、「仁」、「徳」などの儒學基礎概念を再定義し、「徂徠學」の骨子を構築することにある。その成果としてあげられるのは『辨名』『辨道』である。一つは江戸儒學の權威である朱子學の「四書」を注釋することによって朱子學を批判し、自らの徂徠學の「正しさ」を確立することにある〉と論じているように、徂徠学における朱子学批判のプロセスにおいて、従来の日本思想の枠をも打ち破り、日本近代へ向かう思想的エポックであったと考える。また、前掲［2012］

で説明されているように、朱子学が「今文を以て古文を視る」のに対して、徂徠は「当時の用法に従って理解すべし」を提唱しており方法論が異なる。つまり徂徠の政治論をも貫通する「プラグマティズムが横たわっている」（p.106）と述べているように、知性先行の朱子学「技術知」に対して、徂徠は「実践知」であることを示唆している[10]。ちなみに、国学と水戸学とは幕末期における国家主義思想の源流のひとつであり、その思想が徂徠学の影響を受けて成立したと考えられることは、近代日本の国家意識形成において徂徠の思想が重要な役割を果たしたことを意味するものである[11]。このように長州の教育風土は柔軟性に富んでおり、学問的混合種を受容するだけの下地が醸成されていたと考えられる。

〔表１〕山口県出身の学祖・大学創設者一覧

創設者	出身	学問的基盤	創設した大学	主な経歴
山尾庸三	長州藩	江川塾、英国留学	東京大学工学部	長州ファイブ、工部卿
上田鳳陽	長州藩	明倫館	山口大学	儒学者、国学者
渡辺安積	岩国藩	東京大学	中央大学	農商務省権少書記官
江木衷	岩国藩	東京大学	中央大学	内務省参事官、弁護士
山田顕義	長州藩	明倫館、松下村塾	日本大学、國學院大學	工部卿、内務卿、司法大臣
末岡精一	長州藩	東京大学	日本大学	帝国大学法科大学教授
桂太郎	長州藩	ドイツ留学	拓殖大学	陸軍大臣、外務大臣、内閣総理大臣
中村精男	長州藩	松下村塾、東京大学、ドイツ留学	東京理科大学	中央気象台長
成瀬仁蔵	長州藩	山口教員養成所、米国留学	日本女子大学	新潟女学校校長、梅花女学校校長
片山東熊	長州藩	工部大学校	工学院大学	奇兵隊入隊、宮内省内匠頭
澤山保羅	長州藩	米国留学	梅花女子大学	良城隊入隊、キリスト教牧師、教育者
服部章蔵	長州藩	憲章館、東京一致神学校	梅光学院大学	キリスト教牧師、教育者
高村坂彦	山口県	中央大学	徳山大学（周南公立大学）	徳山市長、衆議院議員

出所：後掲の参考文献をもとに筆者が作成

以上のような教育的風土のうえに、現存する大学に繋がる建学を実践した人物（大学創設者）を山口県は多数輩出している[12]。まず、東京大学工学部の前身となる工学寮、工部大学校を創設した山尾庸三、山口大学の学祖とされる上田鳳陽が挙げられる。次に旧制私立大学では、渡辺安積、江木衷（中央大学）、山田顕義、末岡精一（日本大学）。山田は國學院（國學院大學）の設立も導いている。そして桂太郎（拓殖大学）が挙げられよう。さらに新制私立大学として、中村精男（東京理科大学）、成瀬仁蔵（日本女子大学）、澤山保羅（梅花女子大学）、服部章蔵（梅光学院大学）、高村坂彦（徳山大学：2022 年 4 月より周南公立大学）など多彩な学祖群像が浮かび上がる。なお、片山東熊は一般的な認知度は高くはないが工手学校（工学院大学の前身校）の設立に渡辺洪基や辰野金吾、藤本寿吉らと共に参画していることから本稿では、創設者の一人とした。同様に中村精男も東京物理学校（東京理科大学の前身校）の創設者の一人とする。〔表１〕に挙げた内実には、複数（多数）の創設者がいる場合やカリスマ的な学祖と複数の創設者が並立する場合など、学園の生成過程によって様々なケースが散見される。本稿では紙幅に限りがあるため、成瀬仁蔵と山田顕義について

論じることとする。両者は、同郷かつ学統的に共通項をもつものの、建学のプロセスにおいてむしろ対照的である。それらの生成形態の輪郭をあきらかにすることで、その教育思想の淵源も鮮明になるであろう。

キリスト者による女子教育の胎動

まず、日本女子大学の創設者である成瀬仁蔵の教育理念生成の背景を概観する。近代の女子教育の発展に尽力したことで知られている成瀬は、吉敷毛利家に仕える長州藩の士族の家に生まれた。地域および家庭環境は学問奨励の気風があり、郷校憲章館に入学した。中嶌［2003］によれば、「幕末の長州藩においては、有志の士族は実学を重んじ、学派を意に介さない風潮があり、これを統一する必要があるとして、各郷校に朱子学を主とすべき呼びかけがなされた。しかし憲章館は朱子学をとらず」（p.13）というように前にも触れたが、ある意味でフレキシブルな学統であったともいえよう。明治に入って成瀬は山口教員養成所に入学した。教員養成所とは、学制の頒布にともない全国に初等教育を推進する政策に対応しての教員の短期要請機関として設置された。養成所卒業後の成瀬は山口県下の上関・湯田・二島などの小学校に奉職したり、熊毛郡の巡回訓導（教授法を教示する）を務めたりしている[13]。しかしながら成瀬は、それだけで満足するようなことはなく、国家的な志を持ち続けていたのであった。

写真１

写真２

写真１、２　日本女子大学　成瀬記念講堂

その志を大きく展開する契機となったのは、同郷の士族出身の澤山保羅を通してのキリスト教との出会いであった。再び中嶌によれば、「日本の近代社会の展開のなかで、キリスト教徒となったり、牧師として活動する人々の多くは、維新の変革に際しての佐幕派やその変革に参加しにくかった藩の出身者であったといわれるが、沢山保羅は信仰ゆえの例外者」（前掲、p.30）であることを述べているが、維新の原動力の１つであった藩から澤山、成瀬のようなキリスト者の出現は、そもそも武士道とキリスト教の親和性を意味するのではな

いだろうか。というよりむしろ維新後の社会変動から生じた様々な角逐と葛藤における精神的支柱を求めてのことであったものと考える。実際のところ、明治期のキリスト教への入信者の多くが士族階層であり、旧佐幕派の諸藩あるいは維新後の薩長支配下の新政府に参画することのできなかった弱小諸藩の出身である不遇士族の子弟であったことは、この時期の入信形態の著しい特徴であるといえよう[14]。くわえていえば、大濱［2019］は「クリスチャンになった人たちの動機のひとつとして、敗残士族たちがよみがえるための生活の術としてキリスト教を選ぶというものがありました。英学を身につけることによって世に出ていこうという立志の思い」（p.20）を指摘しており、社会変動期における現実的対応という意味において有効な手段の１つであったことは間違いない。また、森岡［2004］が論じているように、維新期の社会変動によって士族は複合的な剥奪を経験した。具体的には、「経済力（資産・収入）の剥奪、政治権力の剥奪、社会威信（名誉）の剥奪、価値体系の剥奪（生活目標、セルフ・アイデンティティの崩壊）があり、さらに経済力・政治権力・社会威信・価値体系を支えてきた共同体の剥奪（崩壊）」（p.129）を挙げているように、これらの複合剥奪から脱出を図り、セルフ・アイデンティティを回復するうえで、キリスト教は大いに有効であったと考える。他方、長尾［2015］は、成瀬がプロテスタントの教えを人間社会の平等主義と捉えて、これを受け入れた理由について、長州藩士として吉田松陰の影響があったことを指摘している。『松陰の「尊皇攘夷」思想では、「天皇の下では、日本人はすべて平等に天皇の臣である」という、一種の平等思想が成り立っているのだ』（pp.140-141）と述べたうえで、高杉晋作が創設した奇兵隊にも同様の平等思想が内在していることを指摘している。また、日本人が英学を学ぶ際の教材はクリスチャンであるなしにかかわらず、聖書であったという。前掲［2019］によれば、その際、初めてキリスト教に触れた日本人は儒教の『大学』にある「君子必慎其独也　小人閑居為不善」の「独りを慎む」というところに内的動機を見い出した、と指摘するように、聖書に道義性を読み取ったのである。「自分たちが習った『大学』に示されたものよりも、キリスト教のほうがモラルにおいて深いものだ、というかたちで聖書を捉えた」（p.20）と述べているように、ある種の親和性が看取される。キリスト教が伝来した当初の仏教側が本地垂迹的思考法の中にキリスト教を包摂する言説[15]を拡散させたこととは異なる受容力である。

1878（明治 11）年に澤山と協力者である成瀬ら教会信徒有志により大阪土佐堀裏町に梅花女学校（梅花女子大学の前身）が開校した。現在の梅花女子大学は「キリスト教の精神に基づき、他者への愛と奉仕の精神を備える自立した女性を育成する」というキリスト教（プロテスタント）の教えを基盤にした明確な建学の精神を掲げており、創立者澤山保羅の愛した「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい」というマタイによる福音書 7 章 12 節の言葉はスクールモットーとして現在も着実に受け継がれている[16]。ここで注目したいのは、女子教育の推進である。学制頒布により男女を問わず就学は奨励されたものの、男女の就学率には大きな開きがあった。再び中嶌［2003］によれば「日本の家庭をキリスト強化する手段として重視され、特にプロテスタント系の宣教は女学校を始め

ることに熱意を示し、東京をはじめいくつかの都市に開校した」（前掲、p.35）というように宣教師の活動は、ミッション・スクールはもとより他の私立女学校の開校を促した側面があると考える。

成瀬は教職から離れ、キリスト教の伝道や社会的啓蒙活動をすることもあったが、新潟女学校の校長に就任や北越学館の創立にも参画するなど、その実践行動は留まることを知らなかった。なおも向学心に燃えた成瀬は 1890 年に渡米し、アンドーバー神学校に特別生として入学した。1892 年にはクラーク大学に移っており、アメリカでは大学の発展期・拡張期が 1860~1918 年であったことを考えると、「女性にも高等教育を」という成瀬のテーマとも合致する時期であったといえよう。実際に、アメリカ留学での蓄積はキリスト教と女子教育という分野において、成瀬の揺るぎない教育的基盤となったことに論を俟たない。1894（明治 27）年 1 月に帰国した成瀬は、まもなく梅花女学校の第四代校長となったものの、1896（明治 29）年 5 月には校長を退き、本格的な女子高等教育機関の設立運動を展開していく。

写真３

日本女子大学　成瀬記念館

成瀬の「女子教育」への注力ぶりは当時の時代背景からしても特異な行動であった。当時の「女子教育」はマイナーな領域であり、多くの困難をともなうものであった。あえてそれに挑む姿勢は日本社会そのものを変革する意義があり、長州の「膨張から凝縮」に蓄積された精神文化から紡ぎ出された反骨精神に通じるものと考える。すなわち、成瀬は女子教育を通じて女性の地位向上を図り、そのことが日本社会を大きく変革していく原動力になると確信したことにほかならない。

とりもなおさず、女子教育の推進に心血を注いだ成瀬には多くの賛同者が現れた。中川小十郎、伊藤博文、大隈重信、渋沢栄一、板垣退助、山県有朋、嘉納治五郎をはじめとする各界の重鎮が賛意を示した。とりわけ日本女子大学校の創設に向けて大きな知遇を得たのは女性実業家として活躍していた広岡浅子との出会いであろう。広岡自身が女性の地位向上を常に意識しており、炭鉱、銀行、生命保険業などの事業で辣腕を発揮していたところであった。成瀬の構想に賛同した広岡は巨額の寄付金のみならず、実家である三井家の土地 5 千 500 坪(小石川目白台)を校地として寄付するように取り計らう[17]。このような成瀬を中心に協力者の広岡らの熱意が実り、1901（明治 34）年に日本女子大学校は開校した。女子教育の先駆者である成瀬の志は、今日の日本女子大学の「女子を人として教育すること、女子を婦人として教育すること、女子を国民として教育すること」という「建学の精神」に連綿として継承されている。現在、日本女子大学には、家政学部・文学部、私立女子大学唯一の理学部、日本初の人間社会学部の 4 学部 15 学科、大学院（家政学研究科、文学研究科、人間社会研究科、理学研究科、人間生活学研究科）[18]を擁する伝統ある女子大学として存在感を高めている。

保守思想による建学の源泉

以下では、日本大学の学祖（國學院大學の設立にも尽力）とされる山田顕義の教育理念生成の背景を概観する。山田は軍人、兵学、思想家、政治家、法律家、教育家などの幅広い側面をもつ学祖であることに論を俟たない。本稿では、創設者・学祖という視点で、教育思想の輪郭を俯瞰したい。山田は、1844（弘化元）年に生まれ[19]、幼名は市之允、後に顕義と改名している。山田家は、大組士という長州藩でも中ほどの家格で禄高は 102 石。親戚には、藩政改革の指導者である村田清風や山田亦介など幕末期の長州藩で活躍した人物がおり、とりわけ村田は長州藩の財政改革を指導し、「八万五千貫の大敵」というスローガンのもと、倹約を奨励すると共に殖産興業に力を入れたことは出色である。また、伯父で長沼流兵学者である山田亦介は、吉田松陰に兵学を教授した人物で、洋学にも造詣が深く、長州藩の軍制改革総責任者として洋式海軍の創設などに尽力した。このような血脈・人的環境は山田に多大な影響を与えたことにほかならない。山田の教育思想を考察するうえで、重要な点は前掲〔表 1〕のように、その学問的基盤である明倫館、松下村塾での教育内容である。山田顕義は 13 歳のとき藩校明倫館に入学。14 歳になった 1857（安政 4）年頃に伯父山田亦介（吉田松陰の武芸の師）の推薦により松下村塾に入門した。吉田松陰は藩校明倫館で山鹿流兵学を教授していたものの、1854（安政元）年に伊豆下田で外国船への密航に失敗して蟄居の身となった。1856（安政 3）年より幽閉されていた実家で松下村塾を開いた。松陰が村下村塾で教えていた期間はわずかに 2 年 10 ヵ月間だったが、この間に 92 名が来塾・入門したという。松陰は藩校明倫館で兵学を教える立場であったが、明倫館のあり方について意見書を藩政府に提出している。さらに、1858（安政 5）年には、「学校を論ず」と題して、「人材を集めれば、国は自然に発展する。発展を期待しなくても発展していく。そのためには学校

をつくって人材を養成することである。だが、今の学校は狭くて、十分に身分の低い者たちを入学させることができない。まして、学校が資格をとるための場になっていることはとんでもないことである。学校は、学ばんとする人たちのためにこそ開放しなくてはならない。今ひとつ大切なことがある。それは、学問する者がともすると空疎の言に陥る傾向にあることである。反対に、農工商の実務にたずさわる者には、学問の必要がわかっていない。両者の間は全くかけはなれている。どちらもいけないことだから、作業場をつくって、両者を一緒に学ばせると、どちらも変わって、大いに役立つ人間になろう」[20]と説いているように、当時から産学並行を説き、士、農、工、商の共学制度をとり、それを通じて、知識の変革を志していたことが感知される。すなわち、松陰は明倫館を改革し、松下村塾を通じて地域全体を変革していくことを志したものであり、松下村塾の教育を明倫館に拡大しようと考えたのである。換言すれば、松下村塾で育成した人材によって、明倫館を変え、さらには日本全体を変革していくことを志向していたことは明白であろう。

山本［1991］によれば、「山田が幕末から明治の当初にかけて、御楯隊、整武隊の指揮官として尊皇攘夷運動、討幕に献身した意志には、松陰からの薫陶があり、松陰の国体観に類似したものがあったことを推察させる」（p.594）と述べているように、山田が理事官として参加した岩倉具視使節団での、「理事官報告書」には国体意識を滲ませている。このことは、欧米諸国の軍事に関する事務、制度等を調査研究するなかで、我が国に同様の事務・制度を施行する条件に万世一系の天皇が固有の特質であることを認識していたことにほかならない。当時の近代国家建設の時代背景からすれば当然の価値観ではある。

写真４

國學院大學 渋谷キャンパス

写真５

國學院大學　神殿

明治維新後、山田は司法大輔、工部卿、内務卿、司法卿を歴任した。とりわけ、法典編纂と神祇官復興運動への尽力は特筆されよう。山田は内務卿として 1882（明治 15）年 1 月に「神官・教導職分離」[21]を実現させており、皇典講究の必要性を強く認識していたのである。近代法の整備と共に「国家の精神」と道徳の確立が肝要であり、そのためには国家有用の人材養成は不可欠であった。これらを教育の分野で実行していく機関として 1882（明治 15）

年に有栖川宮幟仁親王を総裁として皇典講究所が設立された。そして 1889（明治 22）年 1 月、司法大臣の現職のまま皇典講究所所長に就任した。他方、この時期の法学教育は欧米法を教授することが主流であったが、大日本帝国憲法が発布され、諸法典の整備も進んできたこともあり、現実に即した日本法学の研究が喫緊の課題となっていた。いいかえれば、当時の法学教育は欧米法が主流で、日本の歴史や文化から乖離した知識を教えるものでもあった。その意味においても山田は日本法律を教授する学校の設立を痛感していたのであった。しかし、日本法律を教育するための私立学校設立の必要性を痛感しながらも、山田は司法大臣の立場上、なかなかその意を実現することができなかった。ところが、帝国大学教授の宮崎道三郎らが自分と同じ趣旨で日本法律の学校設立計画を進めていることを知り、彼らを全面的に支援することとなった。校舎は皇典講究所を借りることとなり、日本大学の前身である日本法律学校が誕生したのである。現在、日本大学では創立に関与した宮崎道三郎や金子堅太郎をはじめ若き法律学者など 11 名を創立者とし、彼らを全面的に支援した司法大臣山田顕義を学祖としている[22]。創立者のなかで、帝国大学教授であった末岡精一も山口県(長州藩)出身である。くわえて、前述の通り皇典講究所初代所長に就任した山田は 1890（明治 23）年に「國學院設立趣意書」[23]を公表して、同所を母体とする國學院の設立を導いた。

写真 6

日本大学法学部本館

写真 7

学祖　山田顕義之像

再び山本［1991］によれば、「山田顕義には、とくにとりあげて、これが思想的論述であるとする類のものが見当たらない」（p.615）というものの、『山田の活動、業績の全貌には明確な連続的、一貫的、発展的な理念の存在を把握することができる。いま山田の国家理念を最も根本的において云うならば、「本を立てる」というものではなかったか、山田にとってそれはつねに国家の本質を見据えた上での確信であり、それ故に国家意識とその行動が注目された』（前掲同）と論じているように国体を強調しつつも、岩倉使節団に随行した事績からは、海外の知見を活かす進取の姿勢も読み取れることに留意したい。山田の構想は国史・国文・国法の講究を不可欠とした国体教育の樹立であり、その教育思想は日本法律学校（1889 年）、國學院（1890 年、皇典講究所に國學院を設置）の建学に収斂された。

『國學院大學百年小史』[1982] では、「國學院と日本法律学校とは、その根源において同根であったのであり、いずれ機会をみて合体されるべきものであった。しかし、程なくして所長山田顕義伯の急逝という不幸な事態に遭い、実現に至らずして別の道を歩むことになった」(p.50) と述べているように両校は各々の学風を発揚して今日に至っている。

さらに高瀬 [1989] によれば、山田は「皇典講究所の改革に着手し、そのうちに、国文学校構想と国法学校構想をもっていたようである」(p.1196) と述べており、前者は國學院であり、「日本的法律学校」の構想は、当初、国文学校構想のなかに含まれていた国法科の設立趣意で、後に金子らの法律学校構想と競合して、日本法律学校に収斂したものと思われる」(p.1197) と論じているように、日本法律学校は、金子らの原型構想と山田の国法科構想が結合したと考える。この経緯は前述したとおりである。また、佐々木 [1992] は、創立者グループの学統を調査のうえで、『皇典講究所から日本法律学校が出来たのではない。(中略) 欧米の法律を摂取することが主流であった時代に、あえて「日本の法律」を教育・研究することを目的にした創立者の意図が、皇典講究所を経由して発生したのではなく、彼ら創立者の学統にこそ求められるべきもの』であることを論じており、山田顕義、金子堅太郎、穂積八束には、直接間接に水戸学の影響が窺われる。くわえて、穂積八束、宮崎道三郎、斯波淳六郎、末岡精一、添田寿一、樋山資之、平島及平、本多康直には、同時期でのドイツ留学という共通項が注目されよう。すなわち、1881 (明治 14) 年に政府がドイツ化推進に方向転換したタイミングであった。前掲 [1992] によれば、『イギリス流の憲法を主張する大隈派を追放した十四年の政変が象徴するように、プロシャ流憲法への方向が確定した。それは単に法律だけのレベルではなく、政治・学問・思想のドイツ学振興が政府の方針となった。それが故、彼らのドイツ留学は政府の方針に従うものであり、十九年から二十一年にかけて相次いで帰国した彼らが、従来の法律学校とは違った「主旨」を持つ「法律学校」を創立する背景にはドイツ学振興の影響があったことは確かであろう』(p.1065-1066) と述べているように、創立者グループの相互関係および創設の種がドイツで蒔かれていたことは想像に難くない。あくまでドイツ学は手段の 1 つであり、それ以外にも「国学や水戸学、和漢の法律史の知識もまた重要な意味を持っていた」(同、p.1068) というように、国学・神道にも造詣が深い司法大臣であった山田は学祖として適任であったと考える。以上を整理すれば、創立者グループの主要メンバーの学統は、国学や水戸学の影響を強く受け、かつドイツ学の影響も受けていることが特徴といえよう。しかし、単にドイツ法学を教授する学校ではなく、『律令以来の日本法学史を含む「日本の法律」に主眼を置いた点』(同、p.1079) こそ、建学の柱であった。したがって、この柱に由来する建学の精神は、皇典講究所に由来するものではなく、創設者グループの学統に由来するものであり、ドイツ留学や帝国憲法発布を契機として集約された重畳性を帯びたものと考えるべきであろう。

他方、1882 (明治 15) 年 11 月 4 日の皇典講究所開黌式当日、有栖川宮幟仁親王は初代総裁として教職員・生徒に対して、次のような告諭を述べている。

「凡學問ノ道ハ本ヲ立ツルヨリ大ナルハ莫シ故ニ國體ヲ講明シテ以テ立國ノ基礎ヲ鞏クシ

徳性ヲ涵養シテ以テ人生ノ本分ヲ盡スハ百世易フベカラザル典則ナリ而シテ世或ハ此ニ暗シ是レ本黌ノ設立ヲ要スル所以ナリ」[24]

國學院大學建学の精神はこの告諭の「本ヲ立ツル」ことを基底としている。すなわち、日本人が拠って立つ根本をあきらかにするという意味であり、同大学の建学そのものをあらわすことにほかならない。現在、同大学は文学部、神道文化学部、法学部、経済学部、人間開発学部、観光まちづくり学部の 6 学部 13 学科および大学院（文学研究科、法学研究科、経済学研究科）[25]を擁する特色ある文科系総合大学に発展している。

もう一方で、前述した日本法律学校（日本大学の前身）の建学の目的は、「日本の法律は新旧問わず学ぶ」、「海外の法律を参考として長所を取り入れる」、「日本法学という学問を提唱する」という三点からスタートしている。現在、日本大学は法学部、文理学部、経済学部、商学部、芸術学部、国際関係学部、危機管理学部、スポーツ科学部、理工学部、生産工学部、工学部、医学部、歯学部、松戸歯学部、生物資源科学部、薬学部の 16 学部 87 学科、通信教育部 4 学部(法学部、文理学部、経済学部、商学部)および大学院 19 研究科（法学研究科、新聞学研究科、法務研究科、文学研究科、総合基礎科学研究科、経済学研究科、商学研究科、芸術学研究科、国際関係研究科、理工学研究科、生産工学研究科、工学研究科、医学研究科、歯学研究科、松戸歯学研究科、薬学研究科、獣医学研究科、生物資源科学研究科、総合社会情報研究科）[26]の幅広い学問領域を擁する日本最大規模の総合大学に発展していることは既知の事実である。

このことは法律学校を起源とする私立大学が日本近代における総合的高等教育の基盤へと転換していった過程の代表的な事例である。その建学の源泉に根深い保守思想があったことは、後年に高等教育の裾野を拡大させたのみならず、大学発展を強烈に推進し得た精神的支柱が生成されてきた証左ともいえよう。

おわりに

本稿では、前号に引き続き大学の学祖・創設者の出身地における地域特性および教育思想の淵源を掘り下げる試みであった。対象とした山口県は前述のとおり実に多彩な学祖・創設者を輩出しており、本稿では、その一部にしか触れることができず、次号以降に分けて整理してみたい。前掲〔表１〕のとおり、我が国の近代大学の発展形態の類型を概ね包含しており、ある意味で縮図とも考えられる。すなわち、近代日本における山口県出身者の各分野への人材供給の熱量が教育機関という果実へと収斂されたことにほかならない。具体的には、官私に関わらず、富国強兵・殖産興業を志向した大学群であることに違いないが、そのなかでも出色は前述の女子教育であろう。各々の淵源には、膨張から凝縮への時代的な角逐と葛藤があり、朱子学から徂徠学への開展と学問的柔軟性、さらにはキリスト教の受容など特有の個別的要因によって、そのエートスは形成されたものと考える。次号では、〔表１〕で挙げた山口県出身の学祖・大学創設者について、さらなる事例の考察をくわえることとする。なお本稿は（上）、（中）、（下）と三篇に分かれており、後篇以降において、さらなる議論を

展開していく。しかし一方で、かつてこれだけ錚々たる大学の学祖・創設者を輩出した同県における高等教育の現状（大学進学率等）はどうであろうか。これについては多義的な問題かつ今日的課題へと繋がるものであり、同様に次回以降の検討課題とする。したがって後篇（下）では、教育思想の淵源たる地域性と大学進学率の相関関係を軸とした考察と将来の展望にも言及したい。

以上のように本稿では、山口県を淵源とする「建学の精神」および教育思想の輪郭をより明瞭とするのみならず、次代の高等教育の検討に繋がる基礎資料の構築を目的としたい。

参考文献

梅花女子大学ホームページ（https://www.baika.ac.jp/）、2022 年 7 月 3 日検索

梅光学院大学ホームページ（https://www.baiko.ac.jp/university/）、2022 年 7 月 3 日検索

尾藤正英　抄訳［2013］、『荻生徂徠「政談」』、講談社

趙熠瑋［2015］、「荻生徂徠『大學解』における朱子學批判について」、『北海道大学大学院文学研究科研究論集』第十五号、pp.61-79

中央大学ホームページ（https://www.chuo-u.ac.jp/）、2022 年 7 月 3 日検索

福島清紀［2009］、「明治期における政治・宗教・教育」、『富山国際大学国際教養学部紀要』第 5 巻

古川薫［1999］、『山河ありき』、文藝春秋

花井等［1994］、『国際人新渡戸稲造　武士道とキリスト教』、広池学園出版部

池田諭［1968］、『吉田松陰』、大和書房

石原謙［1979］、『石原謙著作集 第十巻 日本キリスト教史』、岩波書店

岩畔豪雄［1967］、『戦争史論』、恒星社厚生閣

岩畔豪雄［1970］、『科学時代から人間の時代へ』、理想社

岩畔豪雄［2015］、『昭和陸軍謀略秘史』、日本経済新聞出版社

岩武光宏［2018］、「旧制私立大学の学祖・創設者の出身地にみる地域特性についての一考察」、『東京交通短期大学研究紀要』、第 23 号、東京交通学会、pp.29-44

岩武光宏［2019］、「幕末維新期にみる社会変動と知的欲求」、『東京交通短期大学研究紀要』、第 24 号、東京交通学会、pp.57-70

岩武光宏［2020］、「戦前・戦後を貫く知的欲求に関する一考察—ＡＩ時代と岩畔豪雄の省察—」、『東京交通短期大学研究紀要』、第 25 号、東京交通学会、pp.71-86

岩武光宏［2021］、『教育思想の淵源と「建学の精神」に関する一考察 ： 大分県出身の大学創設者を事例として』、『総合文化学論輯』、第 15 巻、総合文化学研究所、pp.25-41

笠谷和比古［2017］、『武士道の精神史』、筑摩書房

河合正治、松岡久人、村田修三、布引敏雄、松浦義則、加藤益幹、秋山伸隆、池享、利岡俊昭、木村忠夫、小葉田淳、宇田川武久、山中寿夫、児玉識、藤木久志［1984］、『毛利氏の研究』、吉川弘文館

川合全弘［2019］、「一軍人の戦後 —岩畔豪雄と京都産業大学—（下）」、『産大法学』、53 巻 2 号、pp.1-74

川合全弘［2021］、「科学技術の発展と人類社会の変化—就任の挨拶に代えて（1）—」、『京都産業大学世界

問題研究所紀要』、第 36 巻、pp.175-176
國學院大學ホームページ（https://www.nihon-u.ac.jp/）、2022 年 7 月 3 日検索
國學院大學［1982］、『國學院大學百年小史』、創立百周年記念出版
森和也［2018］、『神道・儒教・仏教－江戸思想史のなかの三教』、筑摩書房
森岡清美［2004］、「明治前期における士族とキリスト教」、『淑徳大学社会学部研究紀要』38 125—169
村井益男、高梨公之、長江弘晃、安井久善、三宅守常、山本哲生、藤原政行、佐々木聖使、高瀬暢彦［1992］、『山田顕義 ― 人と思想』、日本大学総合科学研究所
長尾剛［2015］、『広岡浅子　気高き生涯』、PHP 研究所
中嶌邦［2002］、『成瀬仁蔵』、吉川弘文館
中野剛志［2012］、『日本思想史新論—プラグマティズムからナショナリズムへ』、筑摩書房
中村徹也、倉住靖彦、平瀬直樹、森下徹、金谷匡人、三宅紹宣、日野 綏彦［1998］、『山口県の歴史』、山川出版社
日本大学ホームページ（https://www.nihon-u.ac.jp/）、2022 年 7 月 3 日検索
日本女子大学ホームページ（https://www.jwu.ac.jp/unv/）、2022 年 7 月 3 日検索
小川國治［2003］、『毛利重就』、吉川弘文館
大濱徹也［2019］、『近代日本とキリスト教』、同成社
榊原英資［2018］、『書き換えられた明治維新の真実』、詩想社
司馬遼太郎［2007］、『新装版 王城の護衛者』、講談社
周南公立大学ホームページ（https://www.shunan-u.ac.jp/）、2022 年 7 月 3 日検索
高橋裕史［2006］、『イエズス会の世界戦略』、講談社
橘木俊詔［2021］、『日本大学の研究　歴史から経営・教育理念、そして卒業生まで』、青土社
山口大学ホームページ（http://www.yamaguchi-u.ac.jp/）、2022 年 7 月 3 日検索
山口県文書館 HP（http://archives.pref.yamaguchi.lg.jp/index/page/id/901）、2022 年 7 月 17 日検索
写真１　日本女子大学　成瀬記念講堂、2022 年 6 月 25 日、筆者撮影
写真２　日本女子大学　成瀬記念講堂、2022 年 6 月 25 日、筆者撮影
写真３　日本女子大学　成瀬記念館、2022 年 6 月 25 日、筆者撮影
写真４　國學院大學 渋谷キャンパス、2019 年 12 月 13 日、筆者撮影
写真５　國學院大學 神殿、2019 年 12 月 13 日、筆者撮影
写真６　日本大学法学部本館、2022 年 7 月 17 日、筆者撮影
写真７　学祖　山田顕義之像、2022 年 7 月 17 日、筆者撮影

[1] 岩畔豪雄、陸軍士官学校、シベリア出兵を経て、陸軍大学校卒業。陸軍省軍事課長。日米交渉では駐米大使の特別補佐官を務める。インド独立協力機関長、陸軍少将。陸軍中野学校の創立に参画。戦後は京都産業大学設立に参画。以上、1967 年の岩畔への聴き取り記録をもとに書籍化［2015］された『昭和陸軍謀略秘史』を参照した。

[2] 対象とした 25 校は 1920~1932 年に大学に昇格したものに限定している。

[3] 平瀬［1998］、p.118 を参照。
[4] 前掲書 p.105 を参照。
[5] 山口県文書館 HP（http://archives.pref.yamaguchi.lg.jp/index/page/id/901）を参照（2022 年 7 月 17 日確認）。
[6] 司馬［2007］の『新装版 王城の護衛者』には、儀式について「長州藩には古来、秘儀がある、というのである。この毛利家は、関ケ原ノ役で敗者の位置に立ち、中国十ヵ国にわたった大封を削られ、わずかに防長二州に閉じこめられた。家士は窮乏し、徳川家を恨むこと甚しく、萩城下の士はみな足を関東にむけて寝る習慣をもった。だけでなく、毎年、元旦の未明、藩主と筆頭家老のみが城内の大広間にあらわれ、家老が拝跪し、「徳川討伐の支度がととのいましたが、いかが仕りましょうや」と、言上するのである。「時期はまだ早い」藩主は型どおりにそういう。これが関ケ原戦後、徳川三百年のあいだずっとつづけてきた秘密儀式だというのである」(p.94)と描かれている。儀式の真偽は別にして、長州藩の中核における精神性を象徴する説話であることにほかならない。
[7] 森［2018］では、「『教育勅語』と水戸学とは直接は関係しない」(p.396)としながらも、国体論と儒教倫理の合体は、その後の明治二十三年（1890）の『教育ニ関スル勅語』、いわゆる『教育勅語』に顕現する。「皇祖皇宗、国ヲ肇ムルコト宏遠ニ」とあるのは国体論に基づき、「我ガ臣民、克ク忠ニ克ク孝ニ」とあるのは儒教倫理に基づき、それが一体となって「世々厥ノ美ヲ済セルハ、此レ我ガ国体ノ精華」であるとしている。すなわち、水戸学と『教育勅語』の暗合を指摘している。
[8] 前掲書［2018］、pp.289-291 を参照。
[9] 江戸時代初期の思想界は、朱子学一色にぬりつぶされた観を呈したが、やがて十七世紀の半ばを過ぎると、山鹿素行（1622~85）や伊藤仁斎（1627~1705）が現われて、朱子学に対する批判を唱え、それぞれ素行は聖学、仁斎は古義学と称する新しい独自の思想体系を樹立した。荻生徂徠（1666~1728）は、少し遅れて同様に朱子学を批判して独自の古文辞学を創始した。この三者は、いずれも朱子学のような後世の解釈を捨てて、古代中国の儒教の古典を直接に読み、その本来の精神を把握することをめざした点で共通している。以上、尾藤［2013］、p.267 を参照。
[10] 中野［2012］、pp.105-109 を参照。
[11] 前掲［2013］、pp.328-330 を参照。
[12] 岩武［2018］、pp.29-44 を参照。
[13] 中嶌［2002］、p.26 を参照。
[14] 福島［2009］によれば、『不遇を余儀なくされた彼ら士族インテリゲンツィアの入信でさらに特徴的なことは、キリスト教の唯一人格神を儒教の「天」の概念によって理解し、外国人宣教師のピューリタン精神に武士道精神と相通じるものを見出す方向でなされる場合が多かったという点である』というものの、個別には、その認識に差異があることも指摘している。
[15] 森［2018］、pp288-291 を参照。
[16] 梅花女子大学 HP（https://www.baika.ac.jp/aboutus/philosophy/）を参照（2022 年 7 月 3 日確認）。
[17] 長尾［2015］、pp183-190 を参照。
[18] 日本女子大学 HP（https://www.jwu.ac.jp/unv/academics/index.html）を参照（2022 年 7 月 3 日確認）。
[19] 長江［1992］によれば、山田の生誕年は「弘化元年か、それとも天保十五年にすべきかという問題が未解決である」（p.33）と述べたうえで「明治維新以前においては、改元前の生誕及び死亡であっても、その年の最も新しい改元年号を使用する慣例があったことが判明する。かかる慣習に従えば、山田顕義の生誕年を弘化元年とすべきであろう」（p.36）と論じているように日本大学の創立者として、その多数の伝記が考察の対象とされてきたことが窺える。
[20] 池田［1968］、pp.71-74 を参照。
[21] 佐々木［1987］によれば、山田の考えていた神社神道観について「神社は非宗教であり、神社祭祀に携わる神官は、その祭神を奉じて宗教的布教をしてはならない、というものである」（pp.931-932）というように、神社は非宗教、神官の教導職兼任禁止を望んでいた。
[22] 日本大学 HP（https://www.nihon-u.ac.jp/history/forerunner/miyazaki/）を参照（2022 年 7 月 3 日確認）。
[23] 國學院設立趣意書
人ノ世ニ在ルヤ、各其本国ニ繋属ス。故ニ其国ヲ愛重シ、
其君ニ忠実ナルハ人ノ徳義ニ於テ当然至要ナル者トス。
近時各国人ヲ教フル法、必先其国史、国文、国法ヲ授ケ、
次ニ百科ノ学ニ従事セシムルヲ常トス。是蓋人ヲシテ先其国、
其君ニ於ケル忠愛ノ良心ヲ萌生シ、靄然トシテ赤子ノ
慈母ヲ慕フガ如ク、親和密合シテ離ルベカラザル感想アラシメ、
然ル後始メテ立身治生ノ道、開物成務ノ業ニ進マシメントスルニアリ。

故ニ其効果ハ以テ民タルトキハ善良ノ民タルベク、
以テ兵タルトキハ義勇ノ兵タルベク、以テ官吏タルトキハ
公平正直ノ官吏タルベク、多士済々トシテ挙ゲテ
皆君ニ忠ニ国ヲ愛スル精神ヲ興起セザルハ無キナリ。
各国其国体ヲ異ニシ、君其姓ヲ更ヘ民其統領ヲ立ツル国ニシテ
其臣民ヲ教フル方法猶此ノ如シ。顧ミルニ本邦ハ
万世一君覆帳ノ下ニ無二ノ臣民アリ、親和密合シテ
離ルベカラザル情義ヲ存スルハ、建国以来終始一貫火ヲ観ルガ如シ。
然ルニ輓近内外本末ノ弁大ニ其宜ヲ得ズ。其弊延イテ教育ニ及ビ、
公私学校ノ設甚多シト雖モ、国学ヲ先ニスル方法未行ハレザルハ、
余輩痛歎ニ堪ヘザル所ナリ。
余輩ハ、夙ニ本邦固有ノ学術ヲ研究シ、皇室ノ尊厳ナル所以、国体ノ鞏固ナル所以ヲ講明シ、
人情ノ基ク所、風俗ノ由ル所ヲ尋繹シ、国民ヲシテ益々国家ニ忠愛ナル
徳義ヲ深厚ナラシメンコトヲ希ヒ、前ニ生徒ヲ養ヒ
講筵ヲ開キ本邦ノ典故文献ヲ講究スル方法ヲ設ケシモ、
規模猶未大ナラザル憾アリ。今ヤ機運ノ漸熟スルヲ以テ、
生徒教養ノ法ヲ改正拡張シ、茲ニ國學院ヲ設立シテ専国史、国文、国法ヲ攷究シ、
我ガ国民ノ国家観念ヲ湧出スル源泉トナシ、皇祖皇宗ノ謨訓ニ基キ
固有ノ倫理綱常ヲ闡明シ、且支那泰西ノ道義説ヲ採択シ、
以テ之ヲ補充シ、以テ国民ノ方向ヲ一ニシ、
古今一貫君民離ルベカラザル情義ヲ維持セントス。
固ヨリ此ヲ以テ宗教若クハ政党ノ器用トナスニ非ザルナシ。
若夫レ進ミテ人文ノ発達ヲ追ヒ、世務ノ必要ニ応ズルニ至リテハ、
海外百科ノ学モ網羅兼修シテ此学ノ進歩拡張ヲ計ル可シ。
之ヲ要スルニ本院設立ノ趣意ハ、我ガ国民ノ国民タル忠愛ノ精神ヲ発揮シ、
知育ヲシテ国体ニ基ケル徳育ト併進セシメンコトヲ期スルニ在リ。
明治二十三年七月
山田顕義

以上、國學院大學 HP（https://www.kokugakuin.ac.jp/about/introduction/p3）を参照されたい（2022 年 7 月 3 日確認）。

[24] 前掲 HP(https://www.kokugakuin.ac.jp/about/introduction/p1) を参照（2022 年 7 月 3 日確認）。

[25] 前掲 HP（https://www.kokugakuin.ac.jp/education/fd）を参照（2022 年 7 月 3 日確認）。

[26] 日本大学 HP（https://www.nihon-u.ac.jp/academics/）を参照（2022 年 7 月 3 日確認）。

[A consideration on the origin of educational thought and the "spirit of founding"— A case study of the founder of a university from Yamaguchi prefecture —(first part)]

[IWATAKE, Mitsuhiro・拓殖大学専任職員]

[現在の研究テーマ：地域における知的欲求の軌跡]